
完全人間 不知火仏の一日

東西南北

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

完全人間 不知火仏の一日

【Nコード】

N0030BA

【作者名】

東西南北

【あらすじ】

自称「完全人間」こと不知火仏は、「無知全能」という完全性を持つがゆえに、本質的には人間社会には決して適応することができない。ゆえに彼は歪で、異常で、変質的な普通を演じ、人間社会に適応しようと試みている。そんな彼が繰り広げる非日常的な普通を描く。

プロローグ（前書き）

小説を書いたことがないので、稚拙な文章になり読みづらいと思うことが多々ありすぎると思うので、書き方、または内容にご指摘アドバイスがあれば是非言ってください。
感想をお待ちしております。

プロローグ

プロローグ

世の中には二種類の人間がいる。もちろん厳密に分類すればその二種類から更に派生するわけだが、それについては後々機会があれば、詳しく話そうと思う。

話を戻したいと思う。

完全人間と不完全人間。

これが完全人間こと、不知火しらぬいほとけ仏が定義する二種類の人間だ。

そもそも人間とは非常に不完全な生き物だと僕は常々思っていた。ゆえにほとんどの人間、99.9%以上が不完全人間であり、逆に完全な人間というのは、人間という枠から酷く逸脱した、酷く歪で、不快で、恐ろしく、おぞましい特殊な人間であり、ゆえに人間社会に適合できず、適応という形で人間社会に混ざり込んでいる。

かくいう僕も人間社会に適応しているつもりの人間の一人な訳だが、いかんせん僕の完全性は、人間社会に適応するには、どうにも不適合もので、この先人類の一員としてやっていけるかが最大の不安であり、たまに生きるのが面倒くさくて死にたいと本気で思ったりもする。ただど自殺をしたら負けた気がするから、してやらない。負けるのが嫌いだから。

人間社会に適応するために努力はしているつもりだ、というか努力をしなければ適応できない。

ゆえに僕は不完全人間共が嫌いだ。凄く嫌いだ。努力もせずにあた

りまえのように、人間社会に適合してやがる。

凄く羨ましい。

ゆえに凄く憎い。

これは嫉妬だ。

だがもつと嫌いな存在がある。

それは逸脱した完全人間だ。

人間社会になんなく適応できる完全性を持ちながら、あえて逸脱をしようとするクズども。これは僕が一番嫌いな奴らだ。

なぜなら僕の努力が否定されている気がするからだ。

また自らの完全性を否定して不完全な行いをする不完全な完全人間ども。

こいつらは論外だ。

完全人間は形はどうあれ、完全でなければならぬ。完全から逸脱し不完全になることを僕は許せない。

ゆえにこの愚かな完全者どもを視界に入れたくないくらい嫌いだ。

同じ空気を吸いたくないくらい嫌いだ。

同じ完全人間でいたくないくらい嫌いだ。

どこかに存在していると思いたくないくらい嫌いだ。

だから殺したいくらい嫌いだ。

僕はこれから君たちに僕を紹介しようと思う。もし君たちが僕を不完全な完全人間と言うのなら、僕を殺せば良い。

君たちには決して僕を殺すことはできないが、僕はあえて殺されてやる。もちろん罪には問わない。

だけど、もし君たちが僕に対して完全なる完全人間だと感じたのならば、僕を受け入れて欲しい。

なぜそんな周りにくいことをするかって。

これが僕にとって唯一の人間社会に適応する手段だからさ。

完全人間「不知火仏」の一日

一話（前書き）

導入みたいなもんです。

一話

「はあはあはあ……」

女性というにはまだ少しあどけない、どちらかといえは少女に部類されるであろう彼女は、よく分からない何かから逃れようと必死で、夕闇に染まる街並みを駆ける。

なぜ私が！私が何をしたの？

彼女は、自身が今置かれている状況を理解できず、決して見つからない答えを自問自答しながら、夕闇の街を駆ける。

「くっかつかつか」

男の笑いは、自身の存在を主張するかのようになり、夕闇の街に反響するが、声の主は視認することができず、その声は追跡者と逃走者にしか聞こえない。

「君は、なぜ私が！私が何をしたの？と考えているね？なぜか？それはなぜか？くっかつかつか！君がたまたま人通りのなかつた、18時23分に前宮通りを歩いていて、そこに僕がたまたま通りかかったからだよ。それ以外に一切の理由はなく、そうだね、あえて言うならば君の運が悪かったからだよ。残念だったね、おめでとう！君は僕に選ばれた」

男は今の状況が最高に面白おかしく、自身が創り出した娯楽に酔いしれながら、逃げまとう彼女の近くに存在する。

少女はその理不尽さに怒りを覚える余裕もなく、息をあげて、自身の置かれた状況に悲観しながらも、その存在を振り抜こうと試みる。

「大丈夫大丈夫大丈夫！大事なことから三回言いました。君は死なない殺されない。ただ僕に存在を食べられる。“有象無象”と蟻川虚ありかわうつろの暇つぶしに、存在を食べられるだけ。だから何も怖くないよ」

口調、声質共に相手を馬鹿にしているかと思えば、今までの話の方が嘘だったかのように彼女の耳元で優しく呟くように語りかけた。

男の声は、耳元で囁くように聞こえるはずなのに、その姿はまるで見えない。彼女はその正体不明なに更なる恐怖を覚え、ついには立ち止まり、泣き崩れながら懇願する。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい。なんでもします。だから助けてください。許してください。お願いします」

彼女は嗚咽混じりの声で、誰だか分からない声の主に、服従するかの如く懇願した。

しかし、声の主は無情にて非常な存在。

「くっかっかっかっか」と笑うだけで、男には彼女の精いっぱいせいの懇願はBGM程度にしか感じない。

「君は私に何もしてないのに、なのになんで謝るのかな？むしろ許して欲しいのは僕の方だよ。でも良かった、本当に良かったよ。君は僕の為になんでもしてくれるんだってね。なら許してよ、君の

存在を食べる僕を許してよ」

くっかっかっか。

そう笑いながら男は、彼女の前に姿を現し、彼女の存在を食い尽くした。

しかし彼女は死んだわけではない。

食べられたのはあくまで存在であり、命ではない、ただ彼女は生涯誰からも認知されることはなく、そこにいるだけの不在な存在となってしまうた。ただそれだけの話し。

地震、雷、火事、津波。

日本には様々な理由で無慈悲に、無意味に消え去る存在がある。

今回名前すら登場することなく消え去った彼女は、そういった自然災害のような不条理な存在に出会ってしまった。

ただそれだけなのだろう。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0030ba/>

完全人間 不知火仏の一日

2012年1月2日01時48分発行